

2023年10月29日

「闇と光」

創世記 1:1-5、1:24-31

早川 真牧師

今朝与えられた聖書の箇所は、一番初めに、神が天地を創造された時のことが記されています。神は人間を作る前に、全てのものを人間のために愛によって備えてくださいました。そして全ての生き物が良いものに満たされるように、神は人間をその上に立て、支配と管理を任されました。神がご自分のお造りになったものを見て、良しとされた、と言われる時、それは何者も命を奪い合うことなく、平和に共存していた、ということです。

しかし、今、私たちの現状を見る時に、この言葉をそのまま、その通りだと思えるかどうかと言われると、残念ながらそうではないと言わざるを得ないのではないでしょうか。そこには、聖書が語る人間の罪の問題があります。天地を支配するようにと定められた人間は、神に従わないことによって、全ての生き物のみならず、自分たちをも苦しめ、自らを闇の中に置いてしまうこととなりました。しかし神の愛は、人間から離れることはありませんでした。そのようにして神のかたちが失われた時、神は再び、神のかたちを回復させてくださるために御子イエス・キリストを地上に送られました。

今朝与えられた箇所には、闇は夜と呼ばれています。そして、夕べがあり、朝があったとある通り、夜の後には必ず朝が来ると約束されています。神はどんな闇にも光をもたらすことができになります。そして、混沌としている現状に秩序を与え、天地創造の始めのように互いに互いを害し合うことなく滅ぼし合うこともない世界へと導いて下さいます。そのようなイエス・キリストの光を待ち望みつつ、クリスマスまでの時を過ごしてまいりたいと思います。